

いまはうつろうとした森になっていますが、これは 蘆花が植えた木が成長していったものなんですよ。

蘆花会会長の横山春一さんにお話をうかがい、一人の文学者の自然を愛する心が都会の真ん中に緑の風景を残したことがよく理解できた。横山さんのおっしゃるとおり、これからは住民一人ひとりの自然を大切に心が都会の緑を保全していくのだ。

芦花公園と粕谷八幡一帯



—— 文豪と土地とのかわりはいろいろありますが、このあたりほど大きく深いところは珍しいと思います。芦花公園駅をはじめ、芦花小学校、芦花マンション、芦花最中なんてものもあります。粕谷という地名とともに、いつの間にか芦花という名前が土地そのものを表示しているんですから。蘆花は、それほどその地区に愛されております。せたがや百景に芦花公園と粕谷八幡一帯が選ばれましたが、風景にも徳富蘆花という人の足跡が刻まれていると思いますよ。

蘆花は明治時代から新しい言葉と文章をつくりあげた、明治・大正を代表する文豪だったので、人間にとつて自然は教師であるということを教えたのは蘆花だったと思います。明治四十年にトルストイを訪ねて帰ったばかりの蘆花は、粕谷に移り住んで自ら耕す生活を実行しようとして、現

横山春一さん、恒春園で



徳富蘆花はトルストイを訪問するなど明治・大正の文壇で独自の地位を築いた。自然と自由を愛し、この地で代表作『みみずのたはこ』や『寄生木』などの作品を残している。



粕谷の竹林を風がわたる④

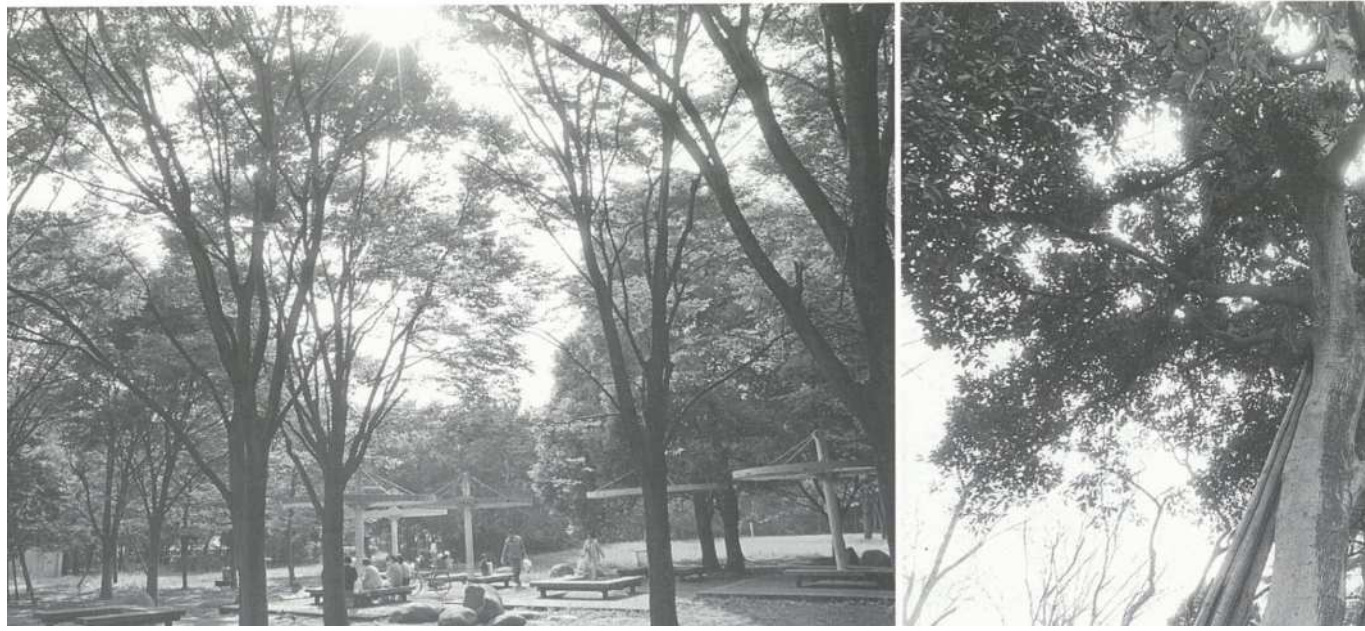


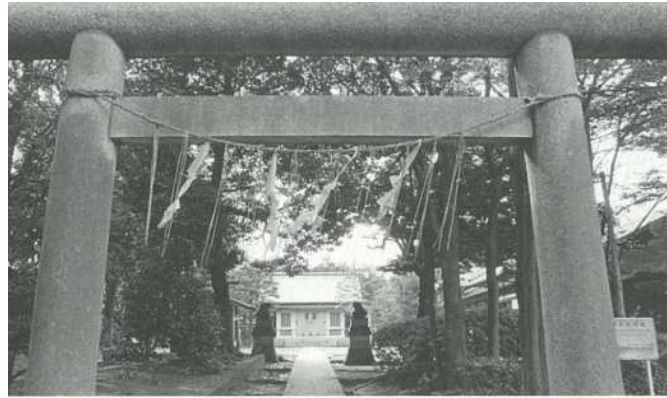
公園内にある蘆花の墓⑤

の土地を買いました。トルストイに学んで、実際に鎌をにぎり鎌を手にしました。ところが、トルストイの農園は六百町歩、皇居が二百町歩といいますが、その三倍です。土地ひとつとってもこんなに大きな違いがあったのは、トルストイのような農業はできません。いぶん低迷した気持になったようです。その蘆花の心の支えになったのが、恒春園の周辺のおだやかな武蔵野の自然と素朴な農民だったのですね。

—— 大正七年、蘆花は「新春」にこう記しています。「……私共は粕谷の住人、粕谷が私共の故郷です。私は故郷を愛します。旅歸りに、村はずれの路標の「粕谷」を見る時、私の心は躍ります。新聞で、「千蔵村」の三字を見ても、私の血は波立ちます。」また、大正九年に世界一周から帰った蘆花は、村人にこう言っています。「世界を一周して見て、日本程いい処はありません。日本では粕谷程いい処はありません。……私共もいよいよ粕谷の土になる事にきめました。何分よろしく」(「みみずのたはこ」)。昭和二年に亡くなった蘆花は、この言葉どおりこの地に葬られた。

木々が作り出す憩いの空間⑥





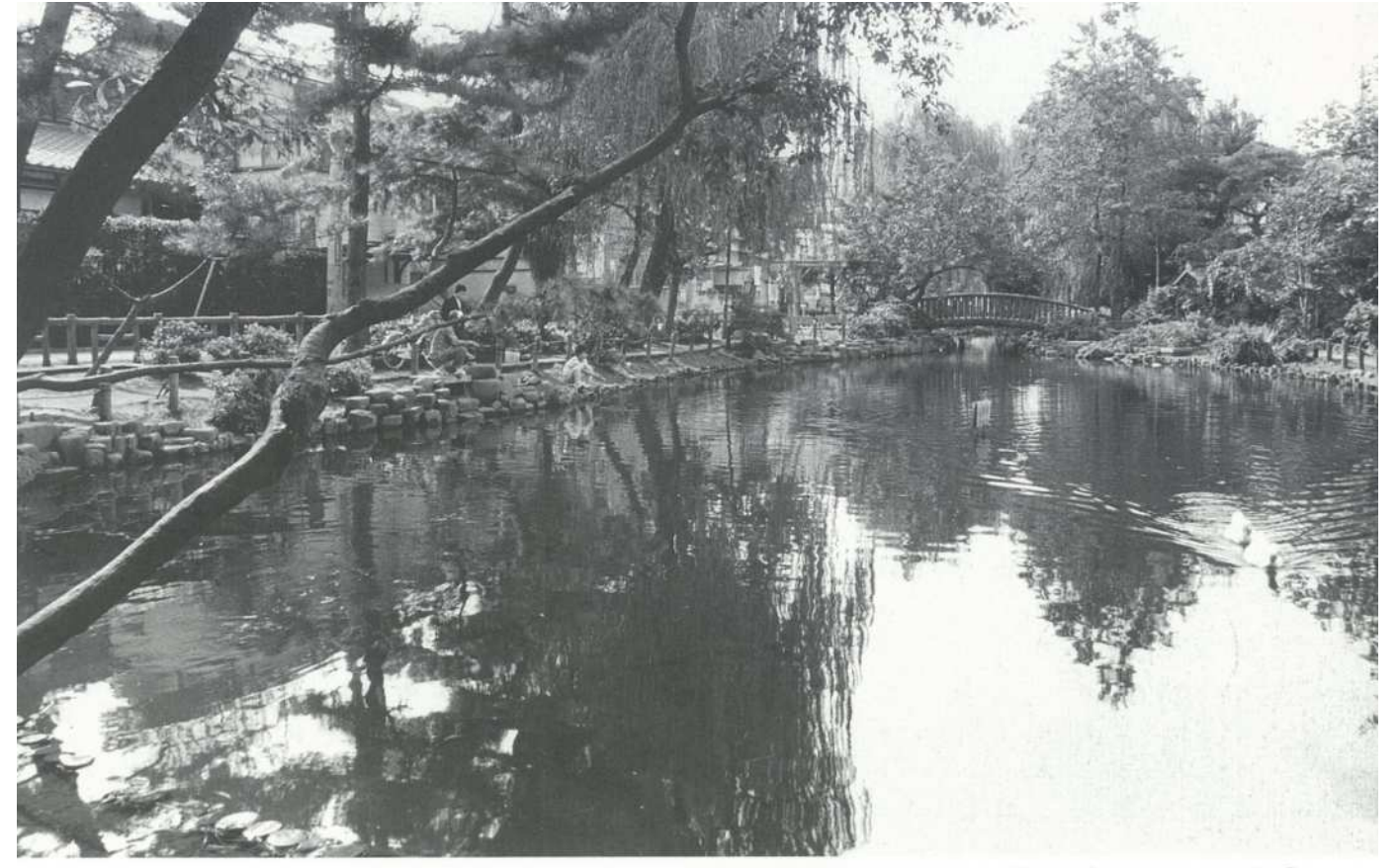
上祖師谷の鎮守、神明社



給田小学校の民俗館はワラ葺きの農家を利用している



武蔵野の古い道、六郷田無道



祖師谷のつりがね池、雨が降ると池底から水がこんこんと湧く

のお話をうかがうと、村人に影響
 のも一因ではないかといえます。
 都市化の波の激しいなかでも、実
 さが守られてきたというところでし
 よう。このあたりには緑が随所に
 っふりと残っているのも、同じよ
 うに自然を愛する心が村人の
 人々に引きつがれてきたからだ
 思います。八幡さまの前には、別
 杉、初代は枯れて今は二代目の若
 木が植えられています。花が訪
 ねて来た客を呼ばれ、送って
 たので、もう呼ばれるようにな
 ったのです。もう世田谷もつか
 都会になりました。もう心がつく
 然を大事にするという心が、自
 出した蘆花の森を、武蔵野の面
 いって欲しいです。武蔵野の面
 影がこのように残っています。か
 住む人々の心が自然にかわった
 からみです。今、自然を大事にす
 心がみんす。蘆花の森はこれか
 ますから、生きつづけるでしょう。

世田谷でもこの一帯は大きな
 木が残っています。緑も多
 すね。蘆花は自ら土を耕し、ま
 た、古い写真で見ると、恒春園の周
 た。古いは、木が植えたもので、
 今はそのほとんどがなくなっ
 成す。それは蘆花が植えたものが
 成長して、一本一本で植えてい
 いろいろな樹木を選んで植えてい
 きましました。一本一本に蘆花の息吹
 きがしみこんでいると、さし
 つかえないでしよう。そして、そ
 の森が蘆花の教師となり、村の人
 の気が持たれて、おだやかに育
 と引つ越して、思いつく青山
 から引つ越して、マテバシイが
 わつって、いま、マテバシイが大
 木になりました。秋になると、近
 あり、今、秋になると、近所の
 子ども達も、自然そのまの森で
 来ます。蘆花の自然そのまの森
 くて、蘆花の自然そのまの森
 農協といわれ、東京の農協のな
 農協といわれ、東京の農協のな

見ごろは天皇誕生日のあたりだね。 つつじの花のカーペットが足元に広がるんだ。

西沢つつじ園の園主西沢信太郎さん（七十七歳）に
母屋の日当りのよい縁側でお話しをうかがう。
冬の日のつつじに囲まれて飄飄と語る西沢翁には
なんともいえない味があった。
春の燃えるようなつつじの花の満開の中で、
つつじをいつくしみ育ててきた翁にもう一度お会いしたいものだ。



つつじ園名物カラタチの
大木の下で、息子さんと

——民間でもって百景に選ばれてとてもうれ
しい気持ですよ。うちの見ごろは四月二十九日の
天皇誕生日、この前後がいちばんきれいだ。咲いて
一週間か二週間はほんとうにきれいだ。咲いて
いるときは、自分のところだが何回見てもきれ
いだよ。ゲンカイつつじが咲き始めるのが四月
の初めのころで、二十日過ぎからさかりに入っ
てオムラサキつつじが咲いたら終り、五月の
十日ころかな。いっぺんに咲くからいいんです
よ。ほかとちがって見る人の足元に花が絨織の
ように広がってて見よう。それに、植木の緑
も目に入ってくるから、ほんとうに鮮やかだね
——いっとき、商売中心のときは百二十種くら
い揃えていたかな。今はもうなくなっちゃった
ものもあるし、とくに珍しいものは種類を集める
ことが好きなお客も結構多くて売れちやいます
から、いまあるのは八十種から九十種くらい。
でも、つつじだけでこれだけ集めているところ
は都内ではないでしょう。北海道あたりから毎
年買いにみえる人もいますよ。
——つつじの特徴はね、丈夫だということ。そ
れに、どんなに立派な何千万という庭を作って
も、つつじやサツキがなかったら庭にはならな
いんです。植木の下草なんです。素人がいじ
っても庭に使うにはいちばん丈夫なんです。葉
もきれいだし、花も咲くでしょう。うちのも
いま紅葉していますが、葉が落ちてなくなるっ
てことはないし。丈夫さといったら植木屋が持
ち歩くんでも、素人が持ち歩くんでも、一年生
の木でも三十年四十年たった木でもね、根を巻
かなくていいんです。ほかの植木だと百円の本
でもちゃんと根巻しないと持ち歩きできない
んですけどね。そういう点がいちばん気楽でも
ってね。自分が考えたのは、手がからなくて
素人にも手入れができて、庭になくちやあな

ない木だからね、いいんじゃないかと思っ
てる程度つつじ専門みたいに植えたんですよ。
そんなわけでどんどん増えていったんだね。始
めてからもう三十年くらいになります。
——まあ一年に一月営業できるだけでそれ以
外は開店休業みたいになってるけど、みんな
がきれいだきれいだといってくるからそれが
うれしくてね。商売にはなんないね。植木屋を
やる土地の相場じゃないんだ、この辺は。こん
なことするよりマンションでも建てたほうが
いいっていわれますよ。だけど土いじってない

ね。なんにも気兼ねがないし、大事に手をかけ
れば必ずいい花が咲いてくれますからね。年二
回の肥料と花が終わってからの刈込みね。放っ
とくと群れ重なって日当りも風通しも悪くなっ
ちやう。二月の寒肥をやっておくと花の色艶が
ちがうし、花が終わってからのお礼肥と。前は
仲間売れもすいぶんやったが、数持っていくけ
ど自分が売れる面白くないのね。もう売り買
いなんてあんまり考えない。見に来てくれれば
うれしいね。裏話はしたくないけど、自分が世話
してほんとの木になるのはやっぱり二十年か三



西沢信太郎さん



十年たたないとこれは植木だつていないんですよ。二十年、三十年たつて庭師に売つて、冗談にいうんだが、お前さんたちは半日で世話しておれの二十余年分をいっぺんにもうけちゃうじゃないかってね。そういう年数なんか考えると、やっぱり素人に売つたほうがそこへ行つても懐かしいやね。こんなに立派になつたんだなあって。仲間に売つたんじゃないやあどこへ行つただかわからないからね。

——うちだけじゃあなくて近所の人も大変なんだよ。ツツジの咲くころお客さん呼んで一杯やるから出費が。百景に選ばれて大変は大変なんだ。公園みたいで管理もするしね。散歩もいいんだけど犬には困るね。

——もともとは農家で、おやじの代から植木屋になつたんですよ。戦前は山手線の新大久保のあたりが植木の本場で、向こうに植木専門にやつている親戚があつてね。サツマイモなんかやつていないで植木を植えてみたらどうかとすめられて植木屋になつたんですよ。戦前はうちにももつと古い木もあつたんだが、戦争中一時食糧難だから、畑にしちやつたんですよ。戦後植木屋にもどつたのは、自分がまだ十歳ぐらいのころ長野のほうからうちに松を毎年つけにきていたじいさんがおやじと酒を飲んでの夜話しを聞いた記憶があつたもんでね。障子一枚こつちかたでこたつとこで聞いていたんだが「戦争のあとは植木の相場が出たそうだ」つて、日清日露のときね。それを聞いていたから今度の戦争が終わつてから、まだ野菜のほうが高かつたんだが、昔じいさんがいつていたから早いうちに植木に切り替えようと思つて、終戦後五、六年たつてから植木をまた作りはじめたんだね。だんだん落ち着いてきて植木が売れるようになってね。ほんとうに商売になつたのはそのころだね。このところ十年くらいは商売にはならな



畑の緑も都市の貴重な緑④

いよ。世田谷にも昔は植木屋が多かつたんだが、今は深大寺や小金井方面に多くなつてね。

——鳥山寺町にはずいぶんうちの木が行つていますね。シイノキなんかほとんどうちのシイノキですよ。府中競馬場のシイノキもうちのやつ。紀元二千六百年記念(昭和十五年)の時には、世田谷にそのころは小学校が三十五校きりなかつたんだが、そこにみんなケヤキを植えました。ビールびんくらいの太さをリヤカーに二、三本のせて田圃調布のほうまで引つぱつていった。こつちの小学校、あつちの小学校つて歩きながら世田谷つて広いなあと思つたね。ああいう木は戦争でどうなつちやつたかな。もう何本も残つていないだろうな。小田急線で下北沢がひらける時分、あつちのほうにもずいぶん運んだよ。下北沢から代田橋のあいだね。そのころはまだ山だつたね。つぎの日の朝植えるから、夕方の四時ごろ出かけてうちに帰つてくるのは夜の十時半から十一時ごろですよ。牛引つぱつてね。昔だからやつたがいまやつたら残業手当て大変だよ。植木の種類も昔とは変わったね。桓根にしたつて今サクラとかヒノキとかそういうものを植えるとはまず滅多にない。カイヅカイブキなんか今は多いね。ヤツテやアオキ、マサキなんか全然売れないし、いざ手に入れようと思つたつてなかなかむずかしい。生け垣も少なくなつちやつてブロックやフェンスになつてるし、庭木もかっこうが違つちやつて、今は木も小さく細く作らなくちゃあ売れないね。昔みたいに根がこつちにあつて頭が向こうにいつた枝のうんと張つた木はもうほとんどないよ。大きな木を作つても庭が狭くつて植えるところがないんですよ。

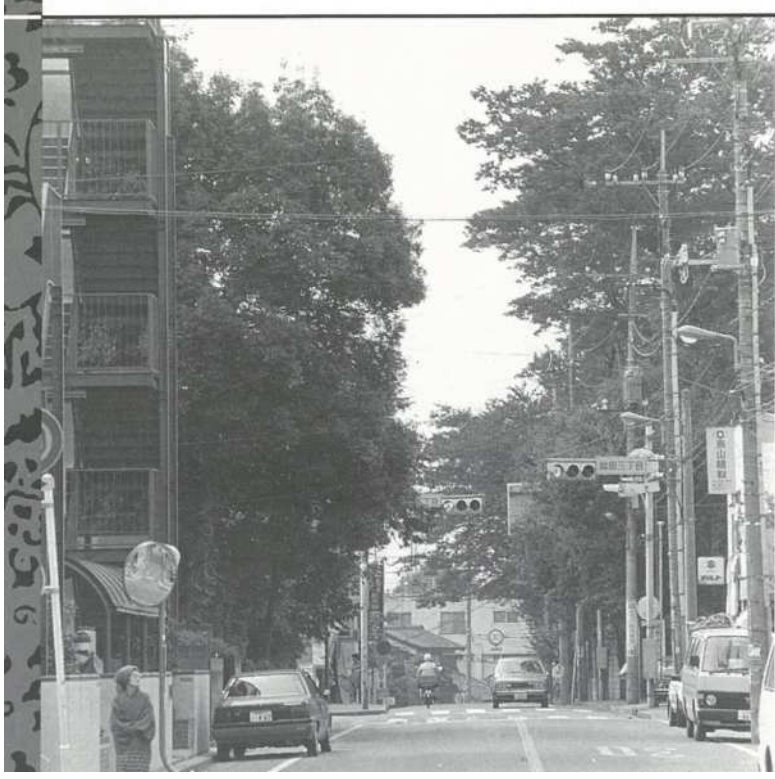
——今はうちへ来てもらつてきれいだなあつていわれるのがいちばんうれしいですよ。見ごろにはみんなに来て欲しいね。



咲き誇るつつじの花④



旧甲州街道の道筋⑤



緑の景観を支えているのは地下水なんです。

「自然の尊さというものは、実は私たちをはじめのつちはよくわかりませんでした。やっていくうちにわかってきました」
 禪往院の住職松永幹雄さんは烏山寺町環境協定ができたまでの道筋をこう締めくくった。境内に生えているコンテリクマゴケを指して、地面の下の水がこの苔になくならないものだとおっしゃる。一瞬、地下水のすばらしい働きが目に見えたような気がする。寺町の環境を守る人たちには、きっと地下水の水の姿が地上にあってもしっかりと見えているにちがいない。



寺が作る街並み④

——関東大震災後、下町からお寺が移ってきてこの烏山寺町はできたんです。この禪往院は浅草からです。浅草から八寺、築地から五寺、荒川から二寺、港から二寺、本所から二寺、渋谷から三寺というふうにして、烏山に現在の二十六寺が集まったわけです。最初はススキの原っぱと畑で、人家などとても少ないところでした。檀家の方が砂利道を歩いてまいりますと、ムンムンと青くさいトマトの匂いがして、西瓜や唐ナスが畑の中にごろごろ転がっているでしょう。にぎやかな下町からきてすいぶん田舎へ引越したんだなあと皆さん思っていました。今は見えなくなりましたが、富士山も見える武蔵野の奥という感じがしたんですよ。

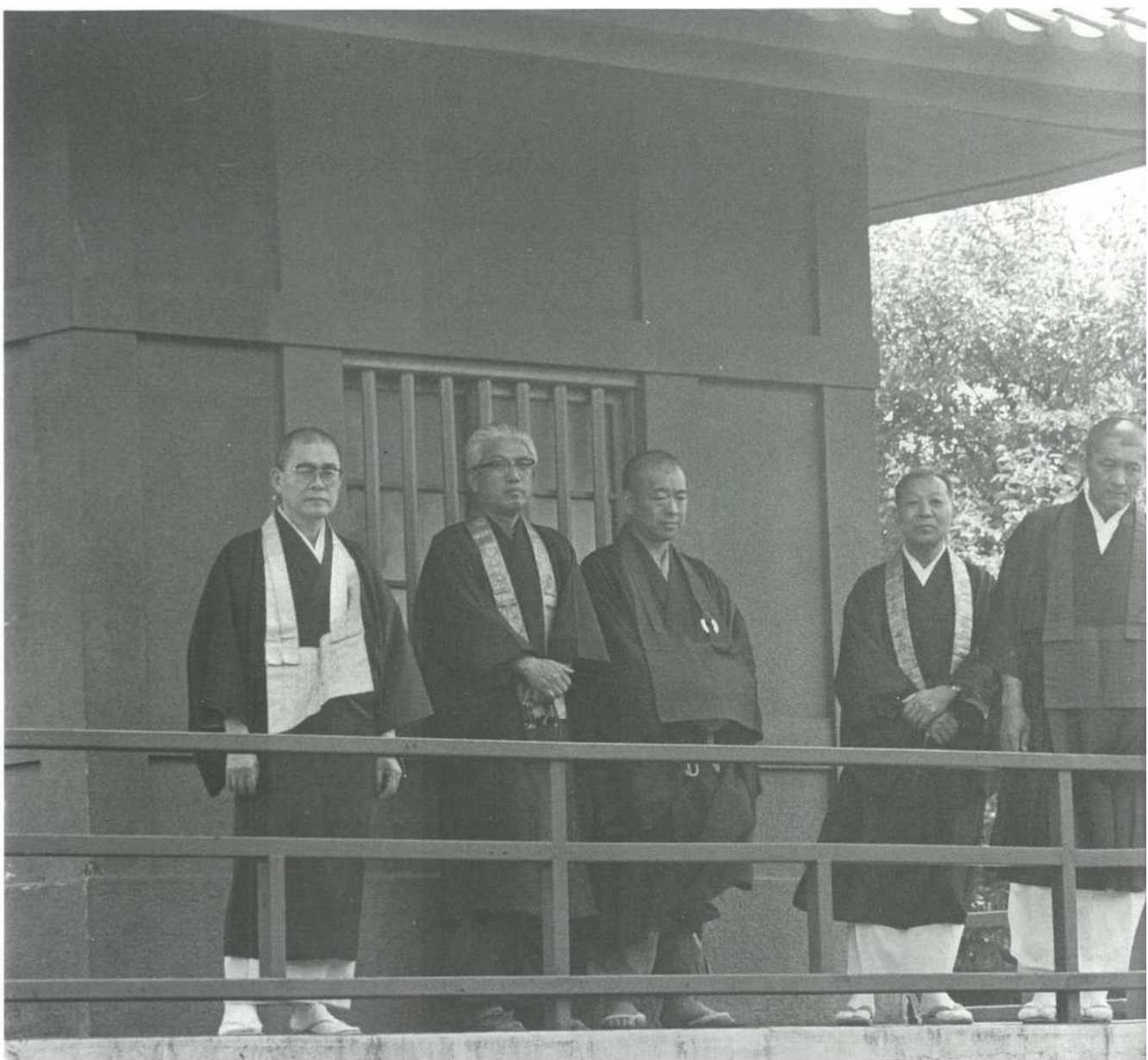


うね。お寺が一軒建つと遠くから屋根がキラキラ輝いて、ほらまた一軒たつたとかね。ときに風が吹きますとものごいほこりが舞い上がりましてね。それでも建物が建って落ち着いてくると、それじゃあ風除けのために境界のところに樹木を植えるとか、庭を作るとか、そんな具合でだんだん寺町らしい雰囲気になってきたわけです。樹木によって入れ替わりしますわね。マツでもサクラでも。サクラは七十年か八十年たちますと枯れてきます。寿命があるわけですからね。だから入れ替わりがあるわけです。でも、当時植えたもので残っているものも多い。昔に比べたら、寺町には圧倒的に樹木が多くなったことは事実です。

——烏山寺町環境協定ができたのは、この烏山寺町の環境を守っていくというところで、「烏山寺町の環境を守る会」を作ったことからはじまりました。十年ほど前です。まあ昭和の初めに移ってきたわけですから、お寺によっては五十年もたつて建物もだんだん老朽化してくるし、機能的にも役割を果たせないということでも新しくしようと計画になるところもある。ところが、ある

寺の計画を見ますと、木造でなくて鉄筋で地下室もある、規模も一千平米という大きさに三階建、ということがわかりました。最初は、みなさんなんとなく漠然と、この辺とは異質なものができるといふ感じがありましたね。できてしまつてからでは遅いということ、とりあえず反対の立場で周りのお寺やそれから住民の方々と一緒に話して話しかけてみたわけです。話していくうちに、ちょうどその建物が寺町の中心に位置するようになつてこうでしたから、日照とか景観とかいろいろ出てきて、漠然と反対ではなくて環境にとつてなにがいちばん大事かってことになつていったんです。

——寺町の寺にはそれぞれ井戸が二つか三つくらいあります。お寺が生活用水としても使うし、また檀家の方がお墓参りに見えて井戸水を汲む。昔は手押しポンプでしたが、大変清冽な水が出てくるわけです。この井戸のもとになる地下水を測ってみますと、とても浅いんですね。ということは地下水位が高いわけです。だいたい烏山のあたりは海拔五十メートルくらいの高さですが、地下水は地表から一メートル五十から二メートルくらいのところにあつて手の届くようなところなんです。井戸の深さも四、五メートルあれば十分まかなつていけるんです。高源院さんに



烏山寺町の環境を守る会のみなさん（左端が松永さん）

は鴨の来る池がありますけど、この辺の地下水の水面がそこに出ているって感じなんです。ところが、地下室を作ることにありますと、規模も大きかったものから五メートルも基礎を掘る、中を乾かすためにポンプで水を汲みあげてカラカラにする、工期も一年以上かかるということなんです、この辺の地下水はずっと下がってしまします。地質を地表から見ると、表土、ローム層、粘土層、そして砂礫層になつている。つまり、工事によって粘土層を抜いてしまうと、雨水が粘土層に止まっていたのが漏れて、地下水が低下する。実は、寺町の直径二キロから二キロ半くらいの範囲の地下一メートル半から二メートルのところは、年間いつも水が滲っている帯になっているんです。滲水帯っていいんですが、いわば袋みたくになっているわけです。大雨が降ると一メートルくらいに上がつてきて、また一メートル半くらいになる。湯水期は二メートルくらいに下がります。烏山通りの向うに水無川という川がありますが、それを越えた三鷹方面ではもう八メートルから十一メートルの深井戸を掘らないと地下水にかからない。烏山と杉並の区道の境から向こうへ行つてもやっぱり浅いところでも六メートルか八メートル掘りませんと出ません。烏山の南へ行つても深井戸です。いろいろ調べてみてこの辺が大変地下水に恵まれた場所だつてことに気づいたわけです。